
竹林奇譚 第五話 空幻

すばる&ぴの子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竹林奇譚 第五話 空幻

【Nコード】

N3260S

【作者名】

すばる&ぴの子

【あらすじ】

ある日、竹青庵の前に行き倒れていた男を、学然と雲隠は拾う。願いを叶えてもらいにやってきたのかと思いきや、実は彼は記憶を失っていた――。

第1章

どこをどう歩いたのか、まったく覚えてはいない。

ただ彼は一心に歩き続けていた。

どこにあるのかもわからぬ目的地を目指して。

行かなければならない——ただ強い思いだけが、彼の足を前に進めた。

日が昇ってから、日が落ちるまで。

国を出てから、いくつかの山を越えた。ときには深い川も渡った。自分が行く先が、果たして正しい道なのかはわからない。けれど、彼は決して歩くことをやめようとはしなかった。

この日も彼は日の出と共に歩きはじめていた。そうして、気づいたときにはとっぷり日が暮れていた。聞こえてくるのは虫の音だけだ。

そういえば、国を出たころには盛大に自己主張をしていた蟬たちも、いつの間にか姿を消している。

季節は夏から秋へと変わっていることを、彼は今ようやく認識した。

（そんなことも気付かなかったのか、俺は……）

すっかり心の余裕を失っている自分に苦笑した。

彼は足を止めて空を仰ぐ。

ぽっかりと空に浮かぶは上弦の月。

遠い昔、同じ月を故郷でみたことを思い出す。

あのときの自分は、何も知らない子どもだった。けれど、たった1つだけ強い願いを持っていた。

その夢を叶えるために、彼は都に出てきたのだ。村人たちの期待を一身に背負って。

そう……自分は——。

強い焦りが心をかき乱す。

ざあああと一陣の風が吹き抜けて行った。

彼は思わず瞼をぎゅっと閉じる。再び双眸を開いたとき彼が目にしたものは――それまでとはまったく異なる景色だった。

言葉を失い、彼は眼を見開く。

（やっと…辿り着いた…のか？）

風と共に舞い落ちてきたのは鋭い刃のような竹の葉。

目の前に現れたどこまでも続く竹林を見て、彼は確信する。

こここそが、かの噂に聞く仙人が住まう地に違いないと。

強い思いを持つ者だけに、開かれる仙人が住まう地への道。

自分は認められて、ようやくたどり着くことができたのだ。

「これで…助かる…」

これでもう、大丈夫。

これでもう、村は救われる。

思った瞬間、視界がぐらりと揺れた。

ざわり。

青い竹の葉が音を立てて散る。

何かを予感させるような強い風が、竹林の中を駆け抜けていった。

第2章

「おい、雲隠^{ユンイン}」

庭で二胡を弾く雲隠のもとに、学然^{シュエラン}の声が聞こえてきた。

「ちょっとこっちまできてくんねーか」

小さく息をつくとき、雲隠は二胡を持ったまま室内へと入る。

「いったいどうしたのです？」

しかし、そこにいると思っていた肝心の声の主の姿がそこにはない。

「学然？」

「あ、こっち、こっち」

どうやら門の外に学然はいるようだ。

（相変わらず大きな声ですね……）

門の外にいる学然の音が、中庭にいる自分に聞こえてきたのだから、と妙なところで感心しつつ、雲隠は急ぎ足で声の主のもとへと歩み寄る。

「学……」

「なんかなー、行き倒れっばいんだけどなー」

学然は門の外でしゃがみこんでいた。

「学然！」

雲隠にしては珍しく大声を上げる。

「あなた、何をしているんです…」

思わず頭を抱える。

行き倒れっばいも何も、行き倒れ以外の何ものでもないだろう。

学然の傍らには、人がうつぶせで倒れていた。

「とりあえずこいつのこと、家に入れたいんだけどさ、いいよな」

「いいも何も、さっさと運び込んであげてください」

「――あのな、さすがに気を失っているやつを1人で運べるほど、俺、力持ちじゃないの」

言われて改めて倒れている者を見れば、なるほど、それなりにしつかりした体格の青年だった。

年齢は20歳前後であろうか。身なりは決して悪くはないが、かといって裕福な貴族とも思えない。つけているものはどれも質素なものだった。

ただ、首からかけている薄汚れた紐の先についている淡い紫色の玉が、彼のそんな姿に対してやけに不釣り合いだ。

「ほら、早く手伝えよ」

学然に急かされて、あわてて雲隠は学然の手助けをする。

学然の背に彼を乗せ、後ろから支えるようにして中庭を通り、客室へと向かう。

「こ、腰が……死にそうだ……」

「落とさないでくださいよ。万が一、あなたの腰がどうにかなったとしても、ちゃんとあとで湿布でも貼ってあげますからご安心を」

おいしょ、と、学然は客室にある床に青年を静かに下ろす。

「このままとりあえず寝かせておくしかないよな」

学然は手際よく青年の身体の様子をあれこれと調べて、外傷がないことを確認すると、「さ、いくぞ」と、部屋をあとにした。

突然の来訪者が目覚めたのは、それから3日も経った後のことだった。

「目が覚めましたか」

頭をかきながらやってきた青年に、雲隠は声をかける。

「えーと……」

「私は雲隠。この邸の主です」

とりあえずおかけなさい、と、雲隠は椅子を指し示す。

青年は言われるがままに、椅子をひくと、そこに腰掛けた。

「お、ようやくお目覚めか」

厨房で昼ご飯を作っていた学然がひょいと顔を出した。

「ちょっと待ってろ、すぐ飯にすつから」

これまたひよいと奥に引っ込む。

雲隠は卓の上にある茶器を引き寄せると、小さな器にお茶を注ぎ、青年の前に差し出した。

青年は軽く頭を下げると、そのままくいと一気に飲み干す。それを見て雲隠はさらに茶を注ぎ足した。

「身体の調子はどうですか？どこか具合が悪いところはありますか？」

「――いや……」

彼がそう答えるのと、ぐう、と盛大におなかになるのとは、ほぼ同時だった。

くすり、と雲隠は笑うと、厨房にいる学然に「どうやらそうとうお待ちかねのようですよ」と声をかけた。

「はいよ！」

学然は運んできた器を青年の前にことりと置いた。

「さ、食えよ。ここに來てから3日間寝たままだったんだからな。

腹も減ってるだろ？」

中には粥が入っていた。温かな粥からは湯気がたち、食欲をそそる。

さすがに数日間何も食べていなかった人間に、得意の饅頭を出すわけにもいかない。学然なりに配慮して、胃に負担がかからないものをまずは出したのである。

青年は「いただきます」と一言言くと、よほどおなかが減っていたらしく、粥をこれまたすごい勢いで胃のなかに流し込んで行く。

豪快な食べっぷりだと、感心しながら、学然と雲隠も自分たちの分を口に運ぶ。

「で、お前、名前は？」

青年が一通り食べ終わって、大きくひと息ついたところで、まず学然が名前を訊ねた。

「――……」

「どうかしましたか？」

青年は粥が入っていた器を卓の上に置くと、青ざめた顔で己の両手をじっと見つめる。

「おい！」

学然は青年に近づくと、ぽんと頭を叩いた。

「どうした？」

顔を覗き込む。だが、青年の反応はない。

固まったまままったく動かない。

「学然……」

低い声で静かに雲隠が学然の名を呼ぶ。

「ちょ、ちよっと待て！」

あわてて学然が手を振る。

「俺は何も入れちゃいない！」

「じゃあ、なんで彼はあなたが作った料理を口にした途端、固まっているんです！」

「な！」

学然はバンと机をたたく。

「何か妙なもん入れていたとしたら、お前だってただじゃすまないだろ！」

「――それはそうですね」

「それに俺は、自分が作ったものに妙なもん入れるような真似しないぞ！料理がもったいない！」

「――確かに……」

「じゃなくてだな！あー、もう！」

こいつだ、こいつ！と、学然は青年の肩を強く揺さぶる。

「おーい、しっかりしろ！」

最後にぺしっと頭を叩いてみる。

そこでようやく青年は我に返ったようだ。

学然の顔を見上げる。

「大丈夫か？どうした？」

まさか、俺の作った料理がマズイくて気を失いかけたとか言うんじゃないだろうな、と学然は目を細めて、意地悪な笑みを浮かべる。

「――わからねえんだ」

「？」

彼の言葉に、2人は顔を見合わせる。

「何がわからないんです？」

「――全部だ」

「全部……？」

「ああ」

青年はうーんと眉間にしわを寄せた。

「まったく覚えてねえんだけど。――なあ、なんで俺はここに来たんだ？ あんたたち、知らないか？」

彼の想定もしなかった言葉に、学然のすっとなきような叫びが竹林に響き渡った。

第3章

記憶をすっかりどこかに落としてきてしまった青年が、その後かろうじて思い出したのは自分の名前だけだった。

彼は「鬼影^{クイイン}」と名乗った。

記憶が戻らなければ、ほかの来訪者のように願いを叶えてやることもできない。また、元いた場所に帰れ、と追いつ返すこともできない。

「しばらくすれば戻るのではないですか」

なんともものんきに雲隠^{ウンイン}の言葉に従い、鬼影はしばらく竹青庵に留まることとなった。

「なあ、ここってどういうところなんだ？」

何もすることがない鬼影は、それでは心苦しいと言って、学然の部屋^{シユエラン}の片づけを手伝っていた。

学然は鬼影から本を受け取ると、高い位置にある本棚にそれを押し込む。

「そうだなあ……うーん、お前から見てここはどんなところに見える？」

学然は逆に鬼影に問う。

まさか問い返されるとは思ってもみなかったのだろう。鬼影は一瞬固まった後、眉をひそめた。

「お前と雲隠以外の人を見ていない気がする。ってことは、ここはよっぽど山奥か？」

「まあ、似たようなもんだな」

曖昧に学然は返事をした。

正直な話、学然自身よくわかっていない、ということもあった。

この庵にたどりつける者が、非常に限られた者だけ、というのはよくわかっている。だが、ではこの庵がある竹林がそもそものような場所にあるのかは、学然は何度雲隠から聞いても理解できない

のだ。

ただ1つ、そんな学然でもはつきりと断言できることがある。

庵の周りには、民家はない。

民家がないのだから、当然のことながら人もいない。いるのは学然と雲隠の2人だけだ。そして、時折こうしてやってくる人だけ。

「ここ」と外界とのつながりがいったいどうなっているのかは、学然にはまったくわからない。「ここ」から出ていこうと思ったことが一度もないから、自分が「ここ」から出られるのかどうかも実は知らない。

やってきた人間たちが、もといた自分たちの世界へ戻っていくのだから、出ようと思えば容易に出られる気もするのだけれど、なぜか学然は「ここ」以外のどこかに行きたいと思ったことが一度もなかった。

いや、自分には、「ここ」にいないてはならない理由があるような気がしてならないのだ。だからこそ、その理由となっていることが消えない限り、雲隠のもとを離れることは絶対にならない気がしていた。

「じゃあ、お前たちはいったい何をここでしているんだ？」

「——お前、本当にここにきた理由をまったく覚えていないんだな」

「そうだと言っている」

「あのな……威張るな」

学然はがつくりと項垂れた。

そして、雲隠が仙人であること。彼は訪れる人の願いを、その人が最も大切にしているものと引き換えに叶えること、この地は特殊な場所で、通常であれば人が入りこむことができないことを話して聞かせた。

「ってことは、俺は何か願い事があつてきた、ってことか？」

「普通に考えるとそうなる。——願いについても、まったく覚えていないのか？」

「覚えていない」

うーんと鬼影は首をかしげる。

「ダメだ、思い出せない」

だが、彼がここに来た、ということは、よほど重大な何かがあり、そして叶えて欲しいという強い願いがあったはずだ。

それを忘れてしまうほどの、衝撃的な何かが彼の身にあったのだろうか。

考えて、学然は首を振った。

「――とてもじゃないが、そのようには見えん……」

思わず声に出して言ってしまう。

この軽さ。どう考えても重大な何かを内に秘めているようには見えない。

「お前、今、何かとても失礼なことを考えただろ？」

「いや、そんなことはないぞ。断じてない」

「ふうん、ま、いいや。で、お前は？」

「は？」

「いや、雲隠のことはわかったけどな、お前は何なんだ？」

「――聞いても楽しかないぞ」

そう前置いて、学然は自分のことも打ち明ける。

と、いっても、結局は自分自身のことを、自分でもわからないのだから、説明のしようがないのだけれど。

だから、鬼影には、自分も記憶がないこと、そして、今は雲隠の傍らでやってくる人たちの対応をしていることを話した。

「なんだ。じゃあ、お前は俺と同じなんだな」

「お前と？」

「そう、同じようなもんじゃないか。お互い、過去の記憶がないってな」

「のんきなやつだな……」

それはお前だろう、と鬼影に言われる。

（確かに、な……）

もう長い間戻らない記憶。

はじめの頃こそ、必死になって取り戻そうとしたが、それも無駄だとわかると、努力をすることもやめてしまった。

それに、もうあまりにも長い年月が経ち過ぎてしまった。すでに外の世界に自分を待つ人もいないだろう……。

そう思うと、記憶が戻らないならばそれでもいい、とさえ思うようになっていく。

だが、だからこそ思うのだ。

鬼影の記憶は取り戻して、そして彼を無事元いた場所へと帰してやるのだと、かたく誓ったのだった。

第4章

「それから幾日か過ぎた。

鬼影クイインの記憶は、少しずつではあるが戻ってきているようだった。

やはり一時的なものなのだろうと、雲隠ウンインは言う。

もしかしたら話をする事で、何かしら記憶がよみがえるかもしれないと言われ、学然シュエランと鬼影は日中、湖のほとりで雑談をすることが、すっかり日課となっていた。

あれから自分の名前以外に彼が思い出したことと言えば、彼が貧しい村の出身であるということ、それから村人たちの力を借りて、官吏になったということだった。

「こんなお役人もいるのか」

鬼影が官吏だと、しかも地方ではなく中央の官吏だと知ったとき、学然はずいぶんと驚いた。

「ホント、お前は失礼なやつだな」

「いや、だって、お役人といったら、もっと堅いやつばかりだと思っていたから」

「まあ、確かにそうかもしれないけどな。俺は違う」
胸を張って鬼影は言う。

「俺、これでもトップの成績で官吏になったんだぞ」

「うわ…ウソだろ…」

「どうだ、敬え」

言われて学然はぷいと横を向く。

「絶対にそれだけはイヤだ」

「お・ま・え・な！」

頭をこぶしでぐりつとやられる。

記憶の大半は未だに戻っていないというのに、鬼影はこんなにも明るい。もともとの性格がそうなのかもしれないが、この明るさは、雲隠や学然の心にも少なからず影響を与えていた。

こういったことは何よりも本人が一番辛いはずだ。その本人がどのように明るければ、周りにも自然と笑みを与える。

「もしかしたら、それがお前を守ってくれているのかもな」

学然は鬼影が首に下げている玉を指さした。

記憶を失ってしまうことなんて、めったに起こることではない。

それこそ、鬼影の身には、想像を絶するような何かが起こった可能性が高い。

けれど、彼は今こうして命を失わずに済んでいる。

彼が庵の前に倒れていたときから気になっていた玉。何の石でできたものかはわからないが、淡い紫色をしていた。

鬼影は無意識のうちにその玉をよく触っている。触っていると、どうやら心が落ち着くようだった。

「ああ……そうかもしれないな」

「それ、何なんだ？」

「さあ、何だろうな？ 覚えていたら、今、こうして苦勞していないぞ」

「――そりゃそうだな……」

我ながら間抜けなことを聞いたもんだと、学然は話題を変えた。

「じゃあさ、お前の国ってどんな国だったんだ？」

「そうだな……」

うーんと、鬼影は考え込む。

どうやらこの部分はまだ思い出していないらしい。

学然は、彼の記憶の糸が少しずつほぐれるように、慎重に言葉を選ぶ。

「国はでかかったのか？」

「――そうだな……。う……ん……それなりにはでかかったと思うんだけどな」

「へえ、周辺の国はどうだった？」

「友好的……だったと思うぞ。ああ、そうだ。少なくとも俺が生まれてから今まで、戦はなかったと思うんだ」

「ほう……」

「そうだ！今の王さまは、建国以来の賢君と言われていたな。だから俺のようなヤツでも官吏になれたんだ」

「待て、お前、その国は……」

学然の頭に、ふっと聞いた話がよみがえってきた。

鬼影が言う言葉のかけらをつなぎ合わせて考えると、どうしても1つの国につながる。

その国は、大国でずいぶんと栄えていた。

貧しい者も、能力さえあれば官吏になることができ、その制度は周辺の国たちからも注目されるほどだった。

だが、賢君が没すると、後継ぎをめぐり動乱が起こった。

国は乱れ、人々は疲弊した。

それまでは、友好的だった周辺の国たちも、その騒乱に乗じて攻め込んできたという。

結果、その国は滅びてしまったそうだ。

「そ……んな……」

鬼影は頭を抱えて、その場に蹲った。

「鬼影！」

小さくうめいていたが、ふっと顔を上げる。

「俺は……」

「？」

「俺は何もできなかった……」

鬼影はぎゅっと両手を強く握りしめる。

「何一つ、あいつらに恩返しできなかった。俺は……俺は……あんな結末を迎えるために官吏になったんじゃない！」

しまった、と思ったときにはすでに遅かった。一気に記憶がよみがえってしまったようだ。

彼は押し寄せる記憶にひどく混乱し、興奮していた。

「ちょっと待て、落ち着け、鬼影」

「落ち着いてなんていられるか！俺は、俺は……！」

「鬼影！」

強く彼の名を呼ぶ。

「――あ……」

「いいか、鬼影、落ち着け。お前はなぜここに来た？ お前が今しなくてはならないことはそれだろ！ よみがえってきた記憶に翻弄されるな！」

がっくりと、鬼影の全身から力が抜けていくのがわかった。

「――すまない……。先に戻っていてくれないか。できれば、1人で頭の中を整理したい」

鬼影の言葉に、一寸、考え込んだ学然だったが、最後には「わかった」と頷いた。

今の彼を1人にするのは少々心配ではあったが、彼はもう一人前の大人だ。それに自分がいたところでどうにかなるものでもない。少しづつ思い出してきた過去を、ゆっくりと1人で整理したい、という気持ちもわからないではない。

学然は立ちあがった。

「じゃあ、俺は先に戻ってる。いくらここが安全な場所だったって、夜は冷える。風邪引く前に戻れよ」

「わかった。すまないな」

少しばかり鬼影の様子が気になりながらも、学然は先に庵へと戻って行った。

湖のほとり。

学然が立ち去った後、鬼影は1人その場所に残っていた。ずっと立ち、空を仰いだ。

夜空にはぽっかりと満月が浮かんでいる。

雲ひとつない空から鬼影に降り注ぐ月光――。

あれから数刻、鬼影は1人、よみがえってきた記憶の糸をひとつひとつ丁寧に通っていった。

すべての記憶が1つになったとき、彼の頬に涙がすうと一筋流れた。

（ああ、そうだ……）

鬼影はようやく思い出したのだ。

すべてを。己自身のことを。もちろん、大切な玉のことも。そして、何をしにここにやってきたのかも。

（――俺は……）

都に旅立つとき、村人たちが魔除けにとくれた珍しい紫の翡翠の玉を、ぎゅっと握りしめて、彼はそれを天にかざす。

（俺は……もう……この世にはいないんだ……）

第5章

その日、鬼影^{クイイン}は夜明け前に戻ってきた。
学然^{シュエラン ユンイン}も雲隠も起きて自分を待っていてくれたことに気づき、彼は
ずいぶんと驚き、そして恐縮した。

「思い出しましたか？」

静かに雲隠が訊ねた。

「ああ」と、鬼影は頷く。

「俺はここに、願いを叶えてもらうために来た」

そう答えた鬼影の瞳には、強い光が宿っていた。

（こいつ、何を思い出したんだ？）

もしかしたら、彼はすべてを思い出したのかもしれない。学然は
何となく彼の雰囲気から感じ取っていた。

そして、それは雲隠も同じだったのだろう。

立ちあがると鬼影のそばに歩み寄る。

「――あなたの願いは何ですか？」

死んでからも叶えてほしいと思うほど、強い願い――。

鬼影は一度瞼を閉じると、静かに双眸を開いた。

「俺の村を救ってほしい」

鬼影は雲隠に訴えた。

自分は貧しい村の出身であること。その村の者たちが、自分の願
いを叶えるために少しずつお金を出して、都へと送り出してくれた
こと。

自分はそんな村人たちの役に立ちたくて、官吏になったこと。そ
の志も半ばに、国が荒れ、そして滅びてしまったこと――。そして、
自分はその動乱の中で命を失ってしまった……ことを。

中央が荒れたのだ。たとえ辺境の地といえども、村もただでは済
んでいないはずだ。きっと村人たちも困窮しているはず。たくさん
の命も失われているだろう。

中央の機能が失われている今、彼らに救いの手を差し伸べてくれる者はいない。本来であれば、自分がそれをすべきだったのだ。そのために自分は官吏になったのだから。なのに……！

彼が思い出した真実は、学然が思っていた以上に重いものだった。「俺はまだ、何も返していない！このままでは死ねないんだ！」

鬼影は雲隠にすがりついた。

「お願いだ。村を、村を救ってほしい！」

雲隠は、じっと彼の訴えを聞いていた。

だが、雲隠ははっきりとこう告げたのだ。

「それはできません」

それは拒絶の言葉だった。

驚いたのは学然だ。

今まで、この庵を訪ねてきた者たちの願い。彼がそれを、断ったことは、ほとんどない。

どんな願いであっても、彼らの大切なものと引き換えに叶える、それが雲隠だ。

なのに、彼は今、はっきりと「できない」と断ったのだ。

「雲隠、お前……！」

「——学然、こればかりはできないことなのです」

ゆっくりと首を横に振る。

「俺の願いは、叶えるのに値しないものか？」

震える声で鬼影は訊ねた。

彼にとってもまた、断られることは想定外だったのだろう。

「それとも、俺が引き換えとして出せるものが大したものではないからか？」

鬼影は大切な翡翠の玉を握りしめた。

雲隠はこれまた「いいえ」と首をゆっくりと振った。

そして鬼影に向かって微笑んだのだ。

「叶える必要がない願いだからですよ」

「？」

「あなたの村は、もう大丈夫。確かに動乱に巻き込まれましたが、今はもう立派に再興しています」

「そう…なのか？」

驚いたように目を見開く鬼影。

都から遠く離れた村の様子など、あのごたごたの中では確認する術すらなかったのだ。

「ええ。それにね、鬼影、そんなに人はやわではないですよ」

人は強い。しっかりと根を張り、何度踏みつけられても立ち直る道端に咲く草のように、人はたくましいのだ。

「あなたが伝えたかった言葉は、村の人たちにもきっと伝わっていますよ」

「そうか……」

だから――

「もう、休みなさい。大丈夫ですから」

雲隠の言葉に、鬼影は目を見開いた。

だが、すぐに笑みを浮かべる。まるですべてを覚悟していたかのように。

「俺はやっぱり死んでいるのか？」

「ええ」

雲隠は何も隠さずに、ただそう答えた。

「――そうか」

鬼影は息をひとつはくと、にっと笑った。

「あんた、最初から知っていたな」

「すみません」

「いや……いい」

「ちょ、ちょっと待った！」

一人、事態が飲み込めていない学然は、二人の会話に割って入る。

「どういうことだ！雲隠！」

ぐいと雲隠の腕を引っ張る。

雲隠は困ったように微笑んだ。

見かねて鬼影が説明をする。

「言った通りだよ。俺は死んでいる」

「死んでいるってお前、ここにいないじゃないか！」

今度は鬼影の腕を引っ張る。

「そう言われてもなあ……実際死んじゃまっているんだし」

そんなことを突然言われても、学然には納得がいかない。

どこをどう見ても、鬼影は目の前にいて、そして自分とこうして言葉を交わしているのだ。生きている人と何も変わらない。

「学然……」

悲しそうに雲隠は瞳を伏せた。

「それでも、彼がこの世の者でないことは真実です。——あなたも知っているはず」

ここはそういうところなのですから、と雲隠は静かに言った。

ふう、と学然は大きく息を吐いた。

そうだ、こいつはそういう奴だった。そして、ここはそういうところだった。

常識では通用しないことが起こる場所なんだった——。

何度も経験しているのに、どうしても忘れてしまう。

気持ちを切り替えて、学然は訊ねる。

「——で。お前、なんでわかったんだ、こいつがこの世の者じゃないって。それとも、最初から知っていたのか？」

「初めは何となく、ですよ。確信したのは名前を聞いてからです」

「名前？」

言われて学然は思わず苦笑する。

ああ、そういうことか。

鬼影の「鬼」はこの世ではない者を示す字だ。

「この世ではない者。そして影。ここにくる方が記憶を失っているということは、初めてではありませんが……あまりにもできた名前だったのだ。おそらくこの名は本当の名ではないのでしょう」

普段は決して勘がいいようにはまったく見えないのに、こういう

ことには勘が働くのだな、と学然は苦笑した。

「学然」

鬼影はそれまで見せたことがないほど真面目な顔で、学然を真正面からみた。

「お前、いつまでそうやっているつもりだ？」

「鬼影……？」

言葉を向けられている学然は、わけがわからず戸惑う。

「お前がいるべきところはそこじゃない」

最後に、鬼影は学然の耳元で囁いた。

「お前は俺と同じだ」

言い終えた鬼影はふっと笑った。刹那、彼の姿かたちがぱんと軽い音と共にほじけ、たくさんの光の粒子となった。そうして、すうと空へと吸い込まれていく。

「逝ってしまいましたね……」

雲隠は空を見上げて静かにつぶやく。

だが、隣にいる学然はただ呆然と立ち尽くしていた。

「学然……？」

雲隠が心配そうに、自分の顔を覗き込んでいる。

だが、学然はいつものように軽口をたたくことさえできなかった。その場から動くことさえできず、学然はただただ鬼影の言葉を心の中で反芻し続けていた――。

第6章

(俺は…いたい何者なんだ……?)
鬼影クイインが逝ってしまったあと、学然シュエランは湖のほとりで空を見上げていた。

様子がおかしい学然を心配して、雲隠ウンインもついてこようとしたが、それを断った。

今はただ1人になりたかった。

冴え冴えとした月が、長く天に向かって伸びた竹の間から姿を見せている。

今宵の月はいつものに増して青みを増して冴え冴えとしているように見えた。まるで、今の自分の心を表しているかのようだ。

どこかが凍ってしまったている。

厚い厚い氷に閉ざされて、決して融けることがない。

その奥には、決して忘れてはいけなことがあるような気がするのに。

ここに来る前、自分はどこで何をしていた?

何のためにここに来た?

思い出そうとしても、氷の奥に眠っている記憶は戻らない。

——お前がいるべきところはそこじゃない——

ぐいと締め付けられる胸。

では、自分がいるべきところは……どこだ?

自分はいったいどこにいるべきで、どこに行くべきなんだ?

——お前は俺と同じだ——

何が鬼影と同じなんだ?

記憶が抜けている、というところがか？

だが、それなら最後に記憶を取り戻した鬼影が、わざわざそんなことを言うことはないだろう。

であれば、彼は一体何を伝えたかったのだ？

彼が最後に言った言葉は、学然にとって、とても大切なことのようには思えた。

しかし、それが何なのかが、まったくわからない。糸口さえ見つからない。

「う……」

思い出そうとすると、割れるような痛みが頭を襲う。

学然は膝をつき、両手で頭を抱え込んだ。

思イ出スナ。

思イ出セ。

相反する言葉があふれる。

(やめてくれ……俺は……このまま「ここ」に……)

「ここにいたいんだ！」

ついて出た言葉に目を見開く。

この言葉が何を示すのかもわからず、学然は呆然とその場に立ち尽くしかなかった――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連^{たんのう}横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3260s/>

竹林奇譚 第五話 空幻

2011年5月27日00時43分発行